

芥川龍之介「二つの手紙」におけるヒステリー研究

—ドッペルゲンガーとの関係性を中心に—

朴美姪*

(e-mail : mjeon44@gmail.com)

<目次>

- | | |
|----------------------|-----------|
| 1. はじめに | 4. 佐々木の狂気 |
| 2. 妻のヒステリー | 5. おわりに |
| 3. ドッペルゲンガーの出現とヒステリー | |
| 3.1. 第一の出現 | |
| 3.2. 第二の出現 | |
| 3.3. 第三の出現 | |

キーワード：芥川龍之介(Akutagawa Ryunosuke), 二つの手紙(Two Letters), ヒステリー(Hysteria), ドッペルゲンガー(Doppelgänger), 狂気(Madness)

1. はじめに

芥川龍之介「二つの手紙」は1917(大正6)年9月、雑誌「黒潮」第2巻に発表された短編小説である。「二つの手紙」は警察署長宛てに送られた二通の手紙が何らかの経緯で「予」の手に入り、「ここ」に公開された形で書かれている。手紙の書き手は大学教授の佐々木という人で、一通目には、世間のうわさとなっている妻の不品行はドッペルゲンガーの仕業であるので、世間からの非難を止めてほしいという訴えが書かれている。二通目には、世間の非難に耐えられなかった妻がついに失踪となったが、おそらく自殺したのだとし、警察署長の怠慢や世間の圧迫が妻を死なせたと恨みながら超自然的現象の研究に努めると決意を示す。その決意を冷笑するはずの署長に向けて再び説教をするが、「予」によって「不必要」とされ、手紙の公開は途中で終る。

* 九州大学、博士後期課程3年、地球社会統合科学専攻

「二つの手紙」を讀んでみれば語り手の佐々木が「狂人」であることに気づくのは難しくないであろう。単に佐々木が持ち出したドッペルゲンガーという超自然的な現象を「現実」の知識から「非現実」と判断して「狂人」と見なしているわけではない。手紙の中では妻の不品行についてドッペルゲンガーの仕業だと主張する佐々木の立場と佐々木の妻の不品行に対して姦通事件と見ている世間の立場が佐々木によって語られ、「讀者」に一種の「選択肢」を与えている。手紙の外側にいるもう一人の語り手の「予」が佐々木の手紙を公開することにとどまらず、「不必要」だとして手紙の内容を評価したり略したりする等の不真面目な態度を取ることによって、その手紙を讀む讀者や「二つの手紙」を讀む讀者に佐々木が狂人であり、手紙の内容は狂人の妄想によるものだという判断を促す効果をもたらしている。このような効果は佐々木が「狂人」であること、さらには妻ふさ子の姦通事件を確実なこととして裏づけている。つまり、芥川は「二つの手紙」の創作において、佐々木が「狂人」として讀まれるような仕掛けを作っているように思われるが、こうした仕掛けは讀者を混乱させ、様々な解釋を可能にしている。例えばドッペルゲンガーを説明しようとして持ち出した妻のヒステリーがかえって妻の不倫を想起させていることやドッペルゲンガーの体験を語ろうとしたのがかえって妻の不倫現場を証明してしまうことになっていることである。

「二つの手紙」は作者の意図が不明確だとして「失敗作」という評価が下されているが、おそらくこうした仕掛けが讀者に佐々木を「狂人」として讀ませており、「狂人」が書いた手紙にすぎないという解釋に止まらせているためであると考えられる。そのため、佐々木の狂気とその表象として用いられているドッペルゲンガーを中心に行われた研究が主流となっている。本稿ではドッペルゲンガー發現の一因として挙げられている妻のヒステリーを中心に作品を分析し、新たな解釋を試みたいと思う。

2. 妻のヒステリー

「二つの手紙」について言及されている先行論では、佐々木の狂気とその表象として用いられているドッペルゲンガーを中心に様々な解釋や分析が行われている。小堀桂一郎¹⁾は社会的地位のある佐々木がドッペルゲンガーを信じているのは彼の擬制であって、それは職業からくる自負心が妻の不貞を認めるのを妨げたためであると指摘している。石割透は

1) 小堀桂一郎(1970)「諸国物語と芥川-「アンドレアス・タマイエルが遺書」と「二つの手紙」-」『国文学解釋と教材の研究』15(15)、学灯社、pp.105-111.

それに反論して不名誉な事実を隠蔽するためにドッペルゲンガーの現象を持ち出したというわけではなく、「妻に対する絶対的ともいえるプラトニックな信頼があり、そうした彼の内なるロマンチズムが、彼に〈二重人格という現象〉を強いてもち出させた」²⁾と述べている。ここでは、佐々木がドッペルゲンガーを信じてしまい、「狂人」になった理由について追及されているが、各読み手によって佐々木の狂気に対する解釈が異なっていることがわかる。

今野喜和人は「二つの手紙」が「分身 (double、doppelgaenger) という世界文学の中で出現頻度の高いモチーフを扱った」³⁾作品であり、「このモチーフの日本における代表例としてしばしば言及される存在」⁴⁾であるにもかかわらず、「「失敗」作の烙印を押されてしまって」⁵⁾おり、「創作上の必要から、また身体のパシキ病理学的観察から生まれたドッペルゲンガーへの芥川の持続的な、また並々ならぬ関心を思うとき、本作品の扱いはこれまであまりにも軽すぎたし、本格的な解析の手を待っているように思われてならない」⁶⁾と指摘している。今野は、佐々木が体験したと主張するドッペルゲンガー現象を信じさせるために挙げている幾つかの実例が、イギリスの女流作家キャサリン・クロウの『自然の夜の側面』を典拠としていることを明らかにし、「二つの手紙」で語り手が「開陳しているドッペルゲンガーの説明は、これもまた畢竟「創造的想像力」のテーマに行き着くもの」⁷⁾であり、「「二つの手紙」はこうして西洋における想像力をめぐるイマジネールの波及の中に、無視できない一つの位置を占めるようになる」⁸⁾と述べている。実例の中には「ヒステリカルな素質のある女には、殊にかう云ふ奇怪な現象が起り易いのでございます」(243頁)⁹⁾と妻のヒステリーとドッペルゲンガーの関係性について言及された実例も含まれているが、「夢遊病患者の意志によつて、ドッペルゲンゲルが現れるのでございます」(243頁)とドッペルゲンガーの発現の一因としてヒステリーが挙げられている。

一柳広孝は「二つの手紙」が「ドッペルゲンガーと探偵小説との屈折した接触の様態を見いだすことができる」¹⁰⁾作品であるとし、「探偵小説の定型を踏まえながら、それをずら

2) 石割透(1986)「芥川龍之介-中期作品の位相(1)「さまよへる猶太人」「二つの手紙」「或日の大石内蔵之助」をめぐって-」『駒沢短大文』16、駒沢大学、p.25.

3) 今野喜和人(1997)「芥川龍之介「二つの手紙」の世界-クロウ夫人『自然の夜の側面』の寄与-」『人文論集』48(2)、静岡大学、p.149.

4) 前掲書、今野喜和人(1997)

5) 前掲書、今野喜和人(1997)

6) 前掲書、今野喜和人(1997)

7) 前掲書、今野喜和人(1997) p.169.

8) 前掲書、今野喜和人(1997) p.169.

9) 芥川龍之介(1995)「二つの手紙」『芥川龍之介全集』第2巻、岩波書店。(以下の引用の書誌情報は同一であり、「頁」だけを表記する。)

し、転倒させた探偵小説のパロディーである」¹¹⁾と述べている。一柳は今野の先行論を踏まえつつ、「近代スピリチュアリズム＝心靈学が心靈の科学的解明をその目的の一つとしていたように、クロウの書もまた、そのレベルで一定の科学的地平を有している」¹²⁾とし、「靈術理論におけるヒステリーとは、しばしば特異な精神状態に入ったことを示す指標を考えられた。これらの要素を顧慮すれば、「二つの手紙」発表時に、ヒステリーとドッペルゲンガーをめぐるなんらかの「合理」的な解釋格子が成立した可能性はある」¹³⁾と述べている。しかし、「二つの手紙」が発表された大正期におけるヒステリーは「子宮病」という医学的な概念から女性の病として知られ、様々な分野にわたって女性の修飾語として用いられていた。読者にとってはヒステリーが心靈の領域において説明されたとしても、おそらくヒステリーを考える際に「ドッペルゲンガー」との関係性をすぐに思い浮べることは難しかったと考えられる。

石割は佐々木によって記された妻のヒステリーに対する情報は「読者には、妻が夫と結婚する以前に情人があり、その男と昨年の秋に再会したことで妻の感情に動揺が生じたと、推察できるのだ」¹⁴⁾としており、渡邊正彦は「結婚時前後と現在の佐々木の妻のヒステリーは妻の愛人の存在を暗示している。そうでなくても、ヒステリーが妻の性的不満の表れだったとすれば、男としての性的不安は妻喪失の不安になったのかもしれない」¹⁵⁾と解釋している。

ヒステリーは語源から女性の病として知られ、明治期において「血の道」として理解されていたが、作品が発表された大正期においてもそのまま継がれていた。1912(大正元)年8月に発行された『家庭実用薬剤便覧』には「ヒステリー症(血の道)」¹⁶⁾と項目づけており、『家庭百科全書』第43編として刊行された『看病と養生』では「「ヒステリー」は俗に血の道と云ふ」¹⁷⁾とあり、『現代家庭医学』第1編として刊行された『脳と神経衰弱の巻』では「青春時代より、三十五六歳までの女子に限つて発する、一種の神経病にて殊に長引く人困らせの厄介千万なる病気で、一口に云ふ血の道のことだ」¹⁸⁾と記されている。また、ヒステリーが生殖器と関わっていることから「血の道」という婦人病の概念を持ちつつ、「子宮や膣に烈しき痛を感ず、而して淫慾が非常に高まつたり、又た絶対に淫慾が無くな

10) 一柳広孝(2004)「さまよえるドッペルゲンガー―芥川龍之介「二つの手紙」と探偵小説―」『探偵小説と日本近代』青弓社、p.119.

11) 前掲書、一柳広孝(2004) p.126.

12) 前掲書、一柳広孝(2004) p.123.

13) 前掲書、一柳広孝(2004) p.124.

14) 前掲書、石割透(1986) p.23.

15) 渡邊正彦(2004)「分身―「二つの手紙」「影」を中心に―」『国文学解釋と鑑賞』別冊、p.215.

16) 宇津治三郎(1912)『家庭実用薬剤便覧』東京薬剤協会、p.15.

17) 伊藤尚賢(1912)『看病と養生』『家庭百科全書』第43編、博文館、p.115.

18) 北溪散士(1913)『脳と神経衰弱の巻』『現代家庭医学』第1編、柏原奎文堂、p.57.

つたりするなれども、生殖器に特別の故障が無い限りには、ヒステリーに罹つてゐても、生殖作用は完全に営み得られる」¹⁹⁾と性生活との関係についても言及されている。そうした中でフロイトの性病因論がしばしば紹介され、次第にヒステリーと性欲との関係性が強調されていく。

一方、『神経衰弱と器械療法』では「継母継子、夫の道楽等より自身、自営力を失ふて悲観の極原因となるもの多し、神経質の婦人は兎角疑ふ心深く夫は愛せぬ信用せぬなぞと種々煩悶する折柄女の手紙にても見れば一時逆上の本性を來す事は最も多くある」²⁰⁾とヒステリーの原因が家庭の不和にあるとし、その症状については「種々の変態あれども陰鬱にして悲哀性なり、恐怖涕泣果ては自殺などの活劇を演ずる、是れ皆喜怒哀樂の官能に異変を來し憎らしい嫉ましいなぞの感情益々強く何一つとして手に付く事なく」²¹⁾と記されているが、ヒステリーが医学的な概念に限らず、日常生活の領域にまで広く用いられていたこともうかがえる。

以上のようにヒステリーについて様々な言説が広げられているが、当時のヒステリーは女性固有の病として理解され、病気という医学的な概念だけではなく、女性の感情や行動などをあらわすための形容用語から日常生活の様式まで、「女性」と関わることであれば、領域を問わず様々な形で用いられていたといえよう。当時のヒステリー言説が実生活に関わることが主流であったことを考えれば、ヒステリーはドッペルゲンガーを説明するためには向いていなかったと考えられる。芥川は当時のヒステリーがどのように語られ、理解されているのかを或る程度想定したうえで、ヒステリーを持ち出していたと考えられる。それによってドッペルゲンガーを説明するために用いられている妻のヒステリーが姦通事件を想起させるという効果を生み出していると見ることができよう。

3. ドッペルゲンガーの出現とヒステリー

佐々木は正気であることを信じさせるために、自分自身の個人情報を中心に記すことで身分を明らかにしているが、その情報にはドッペルゲンガー発現の一因として持ち出している妻のヒステリーについても語られている。

19) 前掲書、北溪散士(1913) p.62.

20) インストルメント編(1914)『神経衰弱と器械療法』インストルメント商社、p.16.

21) 前掲書、インストルメント編(1914) pp.16-17.

私は私自身のドッペルゲンゲルと書きました。が、詳しく云へば、私及私の妻のドッペルゲンゲルと申さなくてはなりません。私は当区——町——丁目——番地居住、佐々木信一郎と申すものでございます。年齢は三十五歳、職業は東京帝国文科大学哲学科卒業後、引続き今日まで、私立——大学の倫理及英語の教師を致して居ります。妻ふさ子は、丁度四年以前に、私と結婚致しました。当年二十七歳になりますが、子供はまだ一人もございません。こゝで私が特に閣下の御注意を促したいのは、妻にヒステリカルな素質があると云ふ事でございます。これは結婚前後が最も甚しく、一時は私とさへ殆ど語を交へない程、憂鬱になつた事もございましたが、近年は発作も極めて稀になり、気象も以前に比べれば、余程快活になつて参りました。所が、去年の秋から又精神に何か動搖が起つたらしく、この頃では何かと異常な言動を發して、私を窘める事も少くはございません。唯、私が何故妻のヒステリイを力説するか、それはこの奇怪な現象に対する私自身の説明と、ある関係があるからで、その説明については、いづれ後で詳しく申上る事に致しませう。(233頁)

8歳という年齢差や結婚して4年目になるものの、二人の間に子供がいないという情報から夫婦仲が悪いということを想起させているように思われる。また、結婚前後にヒステリー症状が最も激しかったことは、ふさ子が佐々木との結婚を望んでいなかったことや結婚の前からすでに恋人がいたことの可能性を示唆しているように思われる。このような讀解が可能なのは、性的な欲求不満を原因とするヒステリーのイメージだけではなく、妻に対する客観的な事実に対して佐々木の立場と世間の立場とが対立して解釋されているからであろう。ドッペルゲンガー発現の一因としてヒステリーがあげられたことによって、ドッペルゲンガーと対をなしている姦通事件では、性的な欲求不満を満たすために、不倫をしたとみることが可能になっている。このような構造とともに、ドッペルゲンガーを証明しようとしてあげている佐々木自身の「実例」において不自然な記述があり、それによってドッペルゲンガーに対する信憑性が低くなったことがヒステリーと姦通事件との関係性を強調させる結果となっていると考えられる。

3.1. 第一の出現

「第一の出現」はヒステリーの発症で憂鬱になった妻のために、友人夫婦に譲ってもらった切符で有楽座の慈善演芸会に参加した日のことである。「昨年十一月七日、時刻は略午後九時と九時三十分との間」(234頁)と日付や時刻が明記されている。演芸会に

参加していたことを証明するために、演芸会で行われていたプログラムについて「又実際音曲にも踊にも興味のない私は、云はゞ妻の為に行つたやうなものでございますから、プログラムの大半は徒に私の退屈を増させるばかりでございました。(中略)唯、私の記憶によりますと、仲入りの前は、寛永御前仕合と申す講談でございました」(234頁)とその現場でいなければ知ることのできない演芸会の内容について説明している。この日の話を証明できる人は、友人夫婦と演芸会の関係者(切符係員等)、その演芸会に参加していた「仲入りの前の講談」を行った講演者を含め、その内容を覚えている参加者であるが、これらの目撃者はドッペルゲンガーと姦通事件の両方の目撃者としていられるであろう。

その後、佐々木が妻を一人残してトイレに行き、そのトイレから戻ってくる時、廊下で妻の傍にいるドッペルゲンガーを目撃する。「第二の私」は佐々木を後ろにして立っていたため、顔は見えなかったが、佐々木は自分と同じ服装で同じ姿勢を装っていることから「恐らくその顔も亦、私と同じだつた事でございませう」(235頁)と推察している。しかし、「第二の私」が幻影ではなく、妻の情人であったのであれば、その廊下には「多くの電灯が、昼のやうな光を放つて」(235頁)いて、「大ぜいの人間」(235頁)が通っていたため、妻の情人を目撃した人は数多くいるはずである。それがおそらく姦通事件のうわさの始まりといえる。

「第二の私」は幸いにも妻の視線と佐々木の視線が合った後、視界から消え去ったとあるが、不倫の相手や妻が佐々木に気づいて逃げ去ったと考えることもできよう。また、「第二の私」を見た佐々木は「私の錯愕は、その為、一層驚くべきものになりました。私の恐怖は、その為、一層恐るべきものになりました」(235頁)と語っているが、妻の情人を初めて見た時の感情として解釈しても無難であろう。佐々木は自分が見たドッペルゲンガーを「妻に打明けようかどうかと迷」(236頁)ったが、「打明けられ」(236頁)ず「口を嚙まうと決心」(236頁)する。この「決心」はドッペルゲンガーを見たという事を打明けないということになるが、妻の不倫(=秘密)を打ち明けないというようにも讀まれる。佐々木がその秘密を打ち明けず、口を嚙まうと決心できたのは、自分の妻に対する愛だけでなく、「妻が私を愛してゐなかつたなら」(236頁)と妻の自分に対する愛への信頼をも含まれている。つまり、佐々木は妻の不倫を初めて目撃した時、妻の愛を信頼し、「すべてを幻覚と云ふ名で片づけて」(237頁)、妻の不倫を許してあげようという「決心」をしたのだが、「恰も私のその油断を戒めでもするやうに」(237頁)、「第二の私」が再び目の前に現われる。

3.2. 第二の出現

「第二の出現」は翌年1月17日の木曜日、正午ごろである。その日は佐々木の登校

日で午後の授業はなかったが、突然旧友が訪ねてきたため、一緒に駿河台下の或るカフェーへ向かう。その電車から降りる時に、大時計は12時15分を指していたが、ちょうどその時に再びドッペルゲンガーが現われる。今回は「第二の私」だけではなく「第二の妻」と見られるドッペルゲンガーも現われるが、妻は黒いコートに、焦茶の絹の襟巻をしており、「第二の私」は当時自分と同じ服装の鼠色のオーバーコートに、黒のソフトをかぶっていると詳しく説明されている。佐々木は二人を目撃する前に、「第一の出現」の時と同じく衝撃を受けて茫然とした状態で、恐怖と不安におそわれたとし、それはドッペルゲンガーが現われる「前兆」と説明しているが、おそらく二人が大時計の近くにいたことを考えれば、その「前兆」は二人を目撃していたために起こったとみることができる。

妻の眼が第二の私の顔を甘えるように見ているのを目撃した佐々木は「如何に恐怖に充ちた眼で、眺めましたらう。如何に憎悪に燃えた心で、眺めましたらう」(238頁)と多少感情的に記しているが、妻の不品行を疑わないと訴えた佐々木の立場としては、実際の妻であったとしたら妻は「第二の私」を佐々木自身と思っていたはずであり、妻ではなく「第二の妻」であったとしても、幻影にすぎないはずであったにもかかわらず、愛に満ちている自分自身と妻の姿に恐怖と憎悪を感じている。二人の幻影が世間のうわさを生むからとして憎しむということも考えられるが、佐々木は当時の「第二の私」の位置を「再現するだけの勇気がない」(238頁)と言っていることから、二人の仲の好い姿に対する感情だったといえよう。その時の「第二の私」を再現できない理由は、権威のある自分が他人の目を意識してできないというように讀まれるが、一方では夫婦仲が悪く、妻から甘えてもらったことがなかったために再現ができないというようにも讀まれる。佐々木は「思はず、友人の肘をとらへたなり」(238頁)、二人の跡を追おうとしたが、ちょうど「外濠線の電車」(238頁)が目の前を塞いだため、追えなくなったことに対して「神明の冥助」(238頁)のことだという。憎悪に狂い、二人の幻影を追おうとした佐々木としては口惜しいことであり、二人の幻影には「神明の冥助」のことであるといえよう。当時同行していた佐々木の友人は佐々木と同じ現場を目撃したことができたと考えられるが、その友人によって「狂人」とうわさを立てられ、「第二の出現」の信憑性が疑われる。

佐々木はドッペルゲンガーが現われた同じ時間帯の正午前後に妻が外出していなかったことを証明するために「その前日から、頭痛がすると申して、兎角ふさぎ勝ちでゐた」(239頁)とヒステリーの症状をあげ、ヒステリー発症とドッペルゲンガー発現の関係性を想起させているように思われる。しかし、それに続けて「妻が私に外出の有無を問はれて、眼を大きくしながら、「いゝえ」と云つた顔」(239頁)は「世間の云ふやうに、妻が私を欺いてゐる

のなら、あゝ云ふ、子供のやうな無邪気な顔は、決して出来るものではございません」(239頁)と妻に対する信頼を根拠に証明しようとする非論理的な態度は読者に疑心を持たせている。また、妻の他に「召使つてゐる下女」(239頁)にも確認したとされているものの、下女は「家」において権力者である妻によって動かされる可能性がある。さらにそれまでドッペルゲンガーを信じさせるために「権威」を強調してきた佐々木が「権威」のない「下女」の証言をそのまま受け入れたことには違和感があるだろう。佐々木の妻に対する信頼はドッペルゲンガーを証明することに当って、佐々木に非論理的な態度を取らせることで、読者に疑心を持たせている。「第一の出現」と「第二の出現」では、妻にヒステリー症状があって、その後にドッペルゲンガーが現われている。つまり、性的な欲求不満によってヒステリーが発症し、欲求を満たすために不倫をしたということになるため、ドッペルゲンガーが現われるのはヒステリー発症後になる。しかし、「第三の出現」においては、妻ではなく、佐々木が神経症に悩まされるとされている。

3.3. 第三の出現

「第三の出現」は手紙を書く一週間前である2月13日の火曜日、午後7時ごろである。佐々木は宿直を予定していたが、放課後、激しい胃痙攣に悩まされ、校医に診てもらうと帰宅するようにと忠告されたため、車で帰ることになった。当日は午後から降りはじめた雨が家に着いた時は雨に風が加わり、たたきつけるような吹き降りであった。佐々木は門の前で車賃を払い、玄関まで駆けて行った。玄関はいつもの通り、内から釘がさしてあったが、外から釘を抜くことができる佐々木はいつもと違って、自ら開けて中に入る。当然、家の中にいる人は気づかないはずであるのに、その理由は大方雨の音にまぎれ、開く音が聞こえなかったためであるという。佐々木は茶の間へ行く間に、習慣通りに書斎に手提鞆を置こうとして行ったが、そこでドッペルゲンガーを目にする。

書斎の風景は普段と変わらなかったが、書斎に女と男がいるとはあまりにも「意外な光景」(240頁)であった。佐々木はその時の風景について詳細に説明しながらも、「咫尺の間に見た」(241頁)女と男の顔は「鋭い明暗を作つて」(241頁)いたとして説明を避けているような印象を与えている。午後七時前後という時間帯や激しい雨が降っていたことを考えれば北向きの「窓から来るつめたい光」(241頁)が、二人の「顔の前にある、黄いろい絹の笠をかけた電灯」(241頁)より明るいとは考えられず、部屋の中の二人の顔が全く見えない状態であったとは言いがたい。それに比べ、二人が読んでいたとされている「奇怪な現象を記録して置いた、私の日記」(241頁)は「机の上に開いてある本の形」(241頁)を見た

だけで「すぐにそれがわかりました」(241頁)と判明している。ほぼ同じ位置にいた二人の男女はぼやけて見えて、本の形をしているだけのものが「日記」であることはすぐに分かったというわけである。

ドッペルゲンガーを認める基準として最も重要なのは、同じ人物であるかを識別できる顔である。佐々木は手紙においてドッペルゲンガーが自分と同じ服装であったと確認してあげているものの、顔についてはうやむやにしている。ドッペルゲンガーの顔が佐々木自身と妻ふさ子の顔と同じであったと言及するだけで、ドッペルゲンガーに対する信憑性を高めることができるにもかかわらず、佐々木はなかなかそう言ってくれない。ドッペルゲンガーの顔について説明する際に顔は見えていないが、それは確かにドッペルゲンガーだと断言するというような非論理的な態度を示すことで、当初妻の無実を晴らそうとして送った手紙の目的とは正反対の結果を導いている。佐々木はドッペルゲンガーを見た衝撃で失神してしまうが、その直後の様子について以下のように記している。

私はこの光景を一瞥すると同時に、私自身にもわからない叫び声が、自ら私の唇を衝いて出たやうな記憶がございます。又、その叫び声につれて、二人の幻影が同時に私の方を見たやうな記憶もございます。もし彼等が幻影でなかつたなら、私はその一人たる妻からでも、当時の私の容子を話して貰ふ事が出来たてございませう。しかし勿論それは不可能な事でございます。唯、確かに覚えてゐるのは、その時私のはげしい眩暈を感じたと云ふ事より外に、全く何もございませぬ。私はその儘、そこに倒れて、失神してしまつたのでございます。その物音に驚いて、妻が茶の間から駆けつけて来た時には、あの呪ふべき幻影ももう消えてゐたのでございませう。妻は私をその書齋へ寝かして、早速氷嚢を額へのせてくれました。(241-242頁)

上記の記述では、いくつかの疑問がある。まず、佐々木が失神し、倒れた時の物音を聞いて妻が茶の間から駆けつけて来たとあるが、佐々木はそれを確認できない。茶の間に行く途中で書齋に寄つたため、妻がそこにいたとはっきりと言うことはできないであろう。さらに、佐々木は失神後の風景を直接見たかのように「妻は私をその書齋へ寝かして、早速氷嚢を額へのせてくれました」と言っているが、書齋にいたことや氷嚢が額にのつてあることは、意識が戻った後でも確認できることであるが、「早速」に行動したというのは佐々木にはわかるはずがない。

佐々木が目撃したのがドッペルゲンガーでなければ、妻とその情人は佐々木の日記を讀んでいたことになり、佐々木が姦通事件をドッペルゲンガーの仕業と認識していることを分

かることになる。佐々木にはドッペルゲンガーの「一人たる妻から」「当時の私の容子を話して貰ふ事」は「不可能」であると思われていたが、妻は佐々木が失神した理由を分かっているかのように、佐々木が目覚めると「突然声を立てて泣き出し、自分の貞操を疑っていると佐々木を責める。そのため、佐々木は妻に自分の異常な言動について説明せざるを得なくなり、ついにドッペルゲンガーについて打ち明けることになる。佐々木から「ドッペルゲンゲルの存在が可能かと云ふ事」(243頁)を聞いた妻は「やつと得心が行」(243頁)き、「唯あなたがお気の毒ね」(243頁)と言っては「ちつと私の顔を見つめたきり、涙を乾かし」(243頁)たという。「第三の出現」の場合は自宅で起こったとされているため、佐々木の他に目撃者がいない状態であるが、ベツカアの実例と類似している点や失神後の風景が佐々木以外の第三者に記されているような点などからみると、佐々木の妄想にすぎないという解釈もできると考えられる。佐々木が体験したとして挙げられている3つの実例には、いくつかの「不自然さ」「違和感」がうかがえるが、それに気づいた読者は、佐々木は「狂人」であり、姦通事件は明らかなものとして理解するであろう。

4. 佐々木の狂気

3月上旬に送られた二通目の手紙の全文は、以下のようである。

——警察署長閣下、

閣下の怠慢は、私たち夫妻の上に、最後の不幸を齎しました。私の妻は、昨日突然失踪したぎり、未になどなつたかわかりません。私は危みます。妻は世間の圧迫に耐へ兼ねて、自殺したのではございますまいか。

世間は遂に、無辜の人を殺しました。さうして閣下自身も、その悪む可き幫助者の一人になられたのでございます。

私は今日限り、当区に居住する事を止めるつもりでございます。無為無能なる閣下の警察の下に、この上どうして安んじてゐる事が出来ませう。

閣下、私は一昨日、学校も退職しました。今後の私は、全力を挙げて、超自然的現象の研究に従事するつもりでございます。閣下は恐らく、一般世人と同様、私のこの計画を冷笑なさる事でせう。しかし一警察署長の身を以て、超自然的なる一切を否定するのは、恥すべき事ではございますまいか。

閣下はまず、人間が如何に知る所の少ないかを御考へになるべきでせう。たとへば、閣下の使用せられる刑事の中にさへ、閣下の夢にも御存知にならない伝染病を持つてゐるものが、大勢居ります。殊にそれが、接吻によつて、迅速に伝染すると云ふ事實は、私以外に殆ど一人も知つてゐるものはございません。この例は、優に閣下の傲慢なる世界観を破壊するに足りませう。……

× × ×

それから、先は、殆ど意味をなさない、哲学じみた事が、長々と書いてある。これは不必要だから、ここには省く事にした。(246-247頁)

手紙の内容は「予」によって略されているため、実際にどのような内容がどれぐらい書かれているのかは分からないが、おそらく「閣下の傲慢なる世界観を破壊する」という目的に合わせて書かれてはいるであろう。手紙を書いた日の前日、妻は失踪となり、妻が失踪となった日の前日は佐々木が学校を辞職している。つまり、佐々木が学校を辞めた翌日、妻は失踪したことになる。佐々木は妻が「世間の圧迫に耐へ兼ねて、自殺した」と言っているが、手紙において「不自然さ」や「違和感」に気づいている読者は、大胆に不倫をしてきた妻が「自殺」をしたとは考えられず、情人と逃げたと推察することができるであろう。妻が失踪した日は、佐々木が辞職した翌日で、おそらく佐々木は在宅していた可能性があると考えられるが、妻がいなくなったことについて一通目の手紙のように詳しく記していない。さらに、警察署長宛ての手紙であるにもかかわらず、失踪した妻に対する捜査を依頼もせず、「自殺した」と自ら妻の「失踪事件」を終結させているように思われるが、それまで最愛の妻のために世間と戦ってきた夫佐々木としては不自然である。

佐々木はドッペルゲンガーの体験談を記述する前に、ドッペルゲンガーに対する信憑性を高めるためにいくつかの実例を挙げているが、その中にはドッペルゲンガーと死について言及されている実例も含まれている。

ベツカアはある夜五六人の友人と、神学上の議論をして、引用書が必要になつたものでございますから、それをとりに独りで自分の書齋へ参りました。すると、彼以外の彼自身が、いつも彼のかける椅子に腰をかけて、何か本を讀んでゐるではございませんか。ベツカアは驚きながら、その人物の肩ごしに、讀んでゐる本を一瞥致しました。本はバイブルで、その人物の右手の指は「爾の墓を用意せよ。爾は死すべければなり」と云ふ章を指さして居ります。ベツカアは友人のゐる部屋へ歸つて来て、一同に自分の死の近づいた事

を話しました。さうして、その語通り、翌日の午後六時に、静に息をひきとりました。(231頁)

数学の教授であるベツカアの実例は佐々木が体験したとして挙げられている「第三の出現」の実例と類似しているように思われるが、「第三の出現」においては妻のふさ子ではなく、佐々木がベツカアと同様に書斎でドツペルゲンガーを見ている。ベツカアの実例通りであれば、死ぬことになるのは佐々木であるが、佐々木の実例ではそうならない。ベツカアの実例通りに佐々木が死んでいれば、おそらく佐々木の主張するドツペルゲンガー現象はある程度信頼性を持つことができたであろう。

佐々木は「第一の出現」以来、「一種の不安に襲はれはじめました。それは前に掲げました実例通り、ドツペルゲンゲルの出現は、屢々当事者の死を予告するからでございます。しかし、その不安の中にも、一月ばかりの日数は、何事もなく過ぎてしまひました」(237頁)と、「第二の出現」について記述する前にベツカアの実例について言及し、「死」について想起させようとするかのように書かれている。ベツカアの実例と類似している「第三の出現」では体験を詳述した後、妻のヒステリーと関連して以下のように書いている。

妻のやうにヒステリカルな素質のある女には、殊にかう云ふ奇怪な現象が起り易いのでございます。その例もやはり、記録に乏しくはございませぬ。例へば著名なソムナンビエウルのAuguste Mullerなどは、屢々その二重人格を示したと云ふ事です。但さう云ふ場合には、その夢遊病患者の意志によつて、ドツペルゲンゲルが現れるのでございますから、その意志が少しもない妻の場合には、当てはまらないと云ふ非難もございませう。(中略) フランツ・フォン・バアデルがDr.Wernerに与えました手紙によりますと、エツカルツハウズンは、死ぬ少し前に、自分は他の人間の二重人格を現す能力を持つてゐると、公言したさうでございます。して見ますれば、第二の疑問は、第一の疑問と同じく、妻がそれを意志したかどうかと云ふ事になつてしまひ訳でございませう。所で、意志の有無と申す事は、存外不確なものでございませうまいか。成程、妻はドツペルゲンゲルを現さうとは、意志しなかつたのに相違ございませぬ。しかし、私の事は始終念頭にあつたでございませう。あるいは私とどこかへ一しょに行く事を、望んで居つたかも知れませぬ。これが妻のやうな素質を持つてゐるものに、ドツペルゲンゲルの出現を意志したと、同じやうな結果を齎すと云ふ事は、考へられない事でございませうか。少くとも私はさうありさうな事だと存じます。

(243-244頁)

夢遊病患者に関する実例では、当事者の意志によってドツペルゲンガーが現われるとき

れている。佐々木はドッペルゲンガーについて「意志が少しもない妻の場合には、当てはまらない」く、もし、意志があって妻のドッペルゲンガーが現われたとしても、「第二の私」については説明ができないと指摘している。この疑問点についてエツカルツハウズンの例を挙げ、「死ぬ少し前に、自分は他の人間の二重人格を現す能力を持つてゐる」としたうえで、妻がドッペルゲンガーを現わそうと意志はしなかったものの、佐々木自身のことを「始終念頭に」置いていたため、「第二の私」が現われたと説明している。ベツカアの例では、ドッペルゲンガーは当事者の死を予告するとされていたが、エツカルツハウズンの例では死期が近い人はドッペルゲンガーを現わす能力を持っているとされている。書斎でドッペルゲンガーを見たベツカアは死に、佐々木は死ななくてもいい理由は「ヒステリカルな素質」を持っている妻がドッペルゲンガーを現わしたためである。つまり、「第一の私」と「第二の妻」を佐々木が見たとしても、死ぬことになるのはドッペルゲンガーを発現させたヒステリーの妻ふさ子である。妻ふさ子はドッペルゲンガーを見ていなかったものの、佐々木に見せたことになるので、どうやら死ぬことになる。

二通目の手紙において、佐々木が妻の失踪を「自殺した」と見ているのも、ドッペルゲンガーが「死」を想起させたからだと考えられるが、ここではドッペルゲンガーが現われたためではなく、「世間の圧迫に耐へ兼ねて」自殺したとされている。二通目の手紙において、妻が「失踪」または「自殺」したことに對して、世間の立場から語られていないため、実際に妻がどうなっているのかは判断が難しくなっているものの、妻が「不在」であることは確かなことになっている。佐々木は現在住んでいるところから引っ越し、超自然的現象の研究に努めると妻が自殺したと思って今後の計画を立てているため、手紙では実際の妻の不在に対する真相は明らかになっていない状態で終わっている。一通目では、佐々木が最愛の妻の潔白を晴らすために狂人扱いにされながらも、ドッペルゲンガーを主張していたわけだが、二通目においては、最愛の妻がたった一日「不在」しているだけで「失踪」したとし、その失踪はおそらく「自殺」したためだと思っていることに違和感はあるが、ドッペルゲンガーを信じている佐々木にとって「死」の形はどうであれ、妻の死による不在はすでに予測可能なことであり、それはドッペルゲンガーが現われた結果だと考えられているであろう。

先行研究では、最愛の妻が不倫したことを信じるができなかった佐々木がドッペルゲンガーを妄想したと解釋されているが、ドッペルゲンガーは妻のヒステリー発症後に現われたとされている点やヒステリカルな素質を持っている妻によって、佐々木自身のドッペルゲンガーをも現われてしまったとされている点からみると、ドッペルゲンガーという妄想自体は妻のヒステリーからであるといえよう。つまり、佐々木の「狂気」がドッペルゲンガーを信じてしまったとこ

ろにあるとしたら、ドッペルゲンガーという発想自体が妻のヒステリーから生じたものであり、妻にヒステリーがなければドッペルゲンガーを説明することが不可能になっているため、佐々木の狂気は妻のヒステリーから生まれたということができるとはならないかと考えられる。

5. おわりに

「二つの手紙」において佐々木の狂気とドッペルゲンガーは欠かせないキーワードとして定着している。妻の不倫を認めることができなかつた佐々木がドッペルゲンガーを信じてしまい、「狂人」に扱われる結果になったという解釈が大半を占めているからである。本稿においては先行論を踏まえつつ、「ヒステリー」というキーワードを加えて分析を行った。ヒステリーは人によって原因や症状などが様々であるという特徴から、誰でもヒステリーになれば、誰もがヒステリーを語るできるようになっている。このようなヒステリーの特徴は「二つの手紙」において妻にまつわる一つの事件に対して様々な解釈を可能にしている。

つまり、うわさになっている妻の姦通事件を事実としてみる場合でも、姦通事件を否定し、ドッペルゲンガーの現象としてみる場合でも、いずれも「ヒステリー」を媒介にして説明が可能になっている。ヒステリーは性的な欲求不満を原因として理解されるため、妻の姦通事件を想起させる効果をもたらしている一方で、ドッペルゲンガーにおいては決定的な発現の原因として佐々木によって語られている。こうした中で、佐々木が体験したとして挙げられている3つの事例の中で「不自然さ」「違和感」のある記述に気づいた読み手は、やがて姦通事件を明らかなものとし、佐々木は「狂人」であると認識することになるであろう。

先行論においてはドッペルゲンガーを妄想したのが、佐々木の妻に対する信頼または佐々木自身の社会的な地位や名譽などが妻の姦通事件を認めることを妨げたためだと解釋されているが、ヒステリーをキーワードとして考察を行うと、ドッペルゲンガーという発想自体は妻のヒステリーから生じたものであり、佐々木に現われたとされているドッペルゲンガー現象は妻のヒステリーを欠かせては説明不可能であることが確認できた。佐々木の「狂気」がドッペルゲンガーを信じてしまったところにあるとしたら、佐々木の「狂気」の始まりは妻のヒステリーからであるということができよう。さらに、女性の「狂気」を現わすために用いられていたヒステリーは、「二つの手紙」では佐々木にドッペルゲンガー出現という発想を可能にしたという点で、新たな「狂気」の形としてみることはできないかと考えられる。

【参考文献】

- 芥川龍之介(1995) 「二つの手紙」 『芥川龍之介全集』 第2巻、岩波書店.
- 石割透(1986) 「芥川龍之介-中期作品の位相(1) 「さまよへる猶太人」 「二つの手紙」 「或日の大石内藏之助」をめぐって-」 『駒沢短大國文』 16、駒沢大学、p.25.
- 伊藤尙賢(1912) 『看病と養生』 『家庭百科全書』 第43編、博文館、p.115.
- 今野喜和人(1997) 「芥川龍之介 「二つの手紙」 の世界-クロウ夫人 『自然の夜の側面』 の寄与-」 『人文論集』 48(2)、静岡大学、p.149.
- インストルメント編(1914) 『神經衰弱と器械療法』 インストルメント商社、p.16.
- 宇津治三郎(1912) 『家庭実用薬剂便覧』 東京薬剂協会、p.15.
- 小堀桂一郎(1970) 「諸国物語と芥川- 「アンドレアス・タマイエルが遺書」と 「二つの手紙」 -」 『国文学解釋と教材の研究』 15(15)、学灯社、pp.105-111.
- 一柳広孝(2004) 「さまよえるドッベルゲンガー芥川龍之介 「二つの手紙」と探偵小説-」 『探偵小説と日本近代』 青弓社、p.119.
- 北溪散士(1913) 『脳と神經衰弱の巻』 『現代家庭医学』 第1編、柏原奎文堂、p.57.
- 渡邊正彦(2004) 「分身- 「二つの手紙」 「影」を中心に-」 『国文学解釋と鑑賞』 別冊、至文堂、p.215.

논문 투고 일자 : 2020. 06. 30.

논문 심사 일자 : 2020. 07. 20.

게재 확정 일자 : 2020. 07. 24.

<要旨>

芥川龍之介「二つの手紙」におけるヒステリー研究
—ドッペルゲンガーとの関係性を中心に—

朴美姪

芥川龍之介「二つの手紙」は1917（大正6）年9月、雑誌「黒潮」第2巻に発表された短編小説である。「二つの手紙」では、世間のうわさになっている妻の姦通事件に対して、ドッペルゲンガー現象だと主張する夫佐々木が描かれている。そのため、佐々木は「狂人」として見なされている。佐々木はドッペルゲンガー発現の原因として妻のヒステリーを指摘しているが、そのヒステリーによって姦通事件の可能性が示唆されている。「二つの手紙」に関する先行研究の多くは佐々木の狂気とその表象として用いられているドッペルゲンガーを中心に解釈がなされているが、本稿ではドッペルゲンガー現象発現の一因として挙げられている妻のヒステリーを中心に作品を分析し、新たな解釈を試みたいと思う。

Akutagawa Ryunosuke's Research on Hysteria in "Two Letters"
: With a focusing on the doppelgänger relationship

Park, Mi-Jeon

Akutagawa Ryunosuke's "Two Letters" is a short story published in the second volume of the magazine "*Kokuchō*" in September 1917. "Two letters" describes the main character Sasaki, who claims his wife's affair to be a "doppelgänger phenomenon". It is for this reason that Sasaki is considered to be a "madman". Sasaki identifies his wife's hysteria as the cause of the doppelgänger's manifestation, which suggests that adultery may occur. Much of the previous research on "Two Letters" is centered on the insanity of Sasaki and the doppelgänger phenomenon, which is used to represent Sasaki's madness. I intend to analyze the work overall and attempt a new interpretation.